

## ボツになった投稿原稿

現役時代に原稿執筆の仕事が多かったことから、定年後も文学紀行とかコラムなどを書きホームページへ載せてきました。この「気まま随想」欄は毎月1回のペースですが取り上げるテーマに苦勞することもあります。そんななかで昨年12月から今年の1月にかけて6紙に投稿しましたが（もちろん内容はそれぞれ異なります）、2稿が掲載され（東京新聞と公明新聞＝当ホームページのコラム欄に掲載）、4稿がボツでした。

投稿の採用は新聞社（担当者）の判断、例えば「テーマ」「内容」「時宜」「文章のまとまり」「その時の投稿本数」などによるでしょうが、自分でも採用されなかった要因を推測できるときもあります。せつかく時間をかけて書いた原稿なのでボツになった投稿をこのホームページでご紹介することにしました。掲載とボツの判断と決裁は自分自身ですので……。

（タイトルの前の数字は投稿日です）



### 20211218 朝日新聞「声」 人の心を打つのは人の心

クリスマスの季節に思い出されるのはアメリカの作家 O・ヘンリーの「賢者の贈り物」です。愛し合う夫婦のプレゼントが思いやりのすれ違いで役立たなくなってしまったというちょっと哀しく心温まるストーリー。初めて作品に出会ったのは高校時代の英語の教科書。英文も比較的易しく教訓的な内容だったからでしょう。

ある貧乏な若夫婦はお互いに贈り物をするお金すらなかった。でも妻のデラは皆が褒め称える美しい髪を、夫のジムは誰もが羨む立派な金時計を持っていた。妻は夫の金時計にふさわしい鎖を買うために大切な髪を売り、夫も妻の髪を梳く櫛を買うために金時計を質に入れた。クリスマス当日、二人が差し出したものは結果的に無用の長物となってしまった。

強く深いメッセージに私も仏教徒として深く心に留めている言葉を思い出します。「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり」——財産やお金より健康な身体が大切、そして身体よりも心こそが第一、と。世界どこにあっても、どの民族や宗教、文化でも、人の心を打つのは人の心なのです。コロナ禍で社会がすさみがちな今こそお互いに他を思いやれるような心を持ちたいと思うところです。

### 20211218 読売新聞「気流」 階段も“無料の健康器具”として

コロナ禍での健康管理の一つとしてウォーキングをしている。その際、マンションの階段も活用。地上から7階の自宅まで計88段。当初はやや息切れし、1階ロビーにエレベーターが待っていると「ラッキー！」と誘惑に駆られたが、今は自然に足が階段に向くようになった。下りは足の踏み外しなどで危険なので原則していない。

1日の歩数目標を掲げているが達成はなかなか難しい。階段は天候にも左右されない。運動量も歩くより大きい。近くに有料のスポーツクラブがあるが、こちらはいわば“無料の健康器具”。老いは足から——住いに階段が無い方も、外に出れば電車の駅を初め至る所に階段があり、その気になればできると思う。傘寿になって元気でいられるのも「歩く効用」かもと感謝し、できる限り続けるつもりだ。

## 20211218 毎日新聞「男の気持ち」 コロナ禍ですべての関係者に感謝

コロナ禍をきっかけに始めたウォーキングがほぼ2年経とうとする今も順調に続いている。朝と夕で1日平均8千歩。「良い習慣を身につけたものだ」と内心、悦に入っているところだ。おかげで体調も順調だが、加えて自然の移り変わりを楽しめるようになったことも大きな収穫。

幸いに自宅付近の道路は樹木や花が多く格好なウォーキングコースになっている。歩き始めたばかりの昨年2月にはコブシの白い花が春の到来を告げ、3月には薄桃色のサクラが街路と公園を彩った。4月には多彩なツジが歩道脇を賑やかに飾り、5月には芽吹いたイチョウ並木が淡い緑から濃緑へと徐々に移っていく変化も観察した。

秋に入るとコスモスが真っ青な空の下で爽やかさを演出。春にピンクと白の可憐な花を付けたハナミズキは深緑色から深紅に色づいていった。金色に装いを変えたイチョウの下では地面から銀杏の独特な匂いが鼻を突いてきた。

歩きながら“よくぞこのコロナ禍の2年を無事に乗り越えて来られたものだ”との感慨が湧いてくる。この陰には医療従事者のみならず様々な分野の方々の激務と奮闘があったからだ。寒さも厳しくなり街路樹もすっかり裸で冬空が覗く道路で歩を進めながら、今は第六波を防ぐようお互いに注意していきたいと願うばかりだ。年の瀬にすべての関係者に感謝しつつ拙句が浮かんできた。「落ち葉踏む生き長らえしも皆の支えと」

## 20220103 聖教新聞「声」 「熟年よ、大志を抱け」であり続けたい

今年81歳になります。男性の平均寿命で年相応のいろんな症状が出てきていますが、まずは健康でいることに感謝しウォーキング、水泳と体調管理に努力しています。



昨年は東京オリンピックの大会ボランティアとして晴海の選手村で活動できました。200カ国余から選手が集った現場にいると“平和の祭典に少しでも役立ちたい”という強い気持ちが湧いてきたものでした。

人々や社会のためになる献身の行動。仕事やボランティアに励むこと。そのやり甲斐が生きがいとなり心の体調管理に通じています。歳を取っても”Seniors, be ambitious!”（熟年よ、大志を抱け!）であり続けたい。

私にとっての大志とは広宣流布。創価学会創立100周年の2030年まで貢献をしていくことです。目標があることがどれだけ希望と夢が広がることか。今年の具体的な目標も立てました。昨年、好評だったNHKの大河ドラマ「晴天を衝け」の最終回で渋沢栄一が言っていました。

——「91歳のこの老人でも役に立つことがあるなんてありがたいことだ」「自分が楽しいだけでなく皆が楽しいのが一番なのだ」（以上、趣意）——なんだか自分に向けての激励のようにも聞こえました。渋沢翁の言葉を胸にまたこの1年、元気に頑張っていきたいと思っています。

（写真はこのホームページ用に入れたものです）